



TITLE:

<批評・紹介>日清役支那外交史 矢  
野仁一著

AUTHOR(S):

三國谷, 宏

---

CITATION:

三國谷, 宏. <批評・紹介>日清役支那外交史 矢野仁一著. 東洋史研究  
1937, 3(2): 137-141

ISSUE DATE:

1937-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145597>

RIGHT:

て誤謬が多い。是れ其十一。以上の推論により系統表を作らば左の如くである。



以上ウエラア氏は専ら梵網經蒙文の兩本を精細に對校して推論せる所なるを以て固り大約首肯し得べく、又之を旁證するに難くない。乃ち、大正十二年の夏我が東京帝國大學圖書館にて大震災の爲め消失せし金字蒙文藏經は察哈爾の林丹汗より傳はりしものにして、康熙年間に刊行せられし殿板蒙藏の實に底本たりしものである。而して殿板蒙藏の編纂刊行は殿板番藏の編纂刊行と殆んど同時にして、その影響を受けたるものある事は余の嘗て指摘したる所である。金字經は固り蒙譯原稿本でなく、之より移寫したるものであつて、校正の痕を存したるも、蒙藏を完成したりと云へる林丹汗家より出で、林丹汗の親寫數行を存したるを以て云へば、殆んど是れ蒙譯原本なりと稱すべきである。

惜いかな今之を再び見ることを得ぬ。露藏本は今其詳を知るを得ざれ共、察哈爾より出たりと傳ふれば之を林丹汗本より分出せるものなるは想像に難くない。乃ちウエラア氏の推定せる如く殿本と露本とは兄弟本にして、其祖本の金字藏經なるを知り得る。兄弟兩本の内露本の番本により重校せる形迹はウエラア氏の指摘する所であるが、殿本も亦當に清朝殿板番藏により或は又明朝殿板にもよりて重訂せられしものあるべきは推察し得る。蓋し精審なる校勘の事一に後賢に俟つべきものがある。番蒙藏經諸本は諸國の儲うるもの多からず、學人の研究に資するに便ならず、惜しむべし。我國は輒近幸にも將來多く、番藏諸本は已に各官私大學に通く藏せられ、蒙藏は京都帝大に鈔本を、東洋文庫に殿本を儲うるに至つた。誠に嘉惠の後學に及ぶもの大である。好古の士此の嘉惠を空しくせざらん事希望の至りに堪えぬ。

(以上、石濱純太郎)

### 日清役支那外交史

矢野仁一著

東方文化學院京都研究所研究報告第九  
菊版布裝七〇九頁、定價金五圓

本書發行後已に一年に垂んとし、今日までに滿洲史

學、東亞經濟研究、大阪朝日新聞書評欄等に森田鐵次、西山榮久、根岸信等の諸氏の批評紹介も發表され、今更禿筆を呵すこともないと思ふが、著者の助手として同研究所に祿を食んだのだから何か書くことがあらうと編輯者に慫慂され、敢て筆を執つてみた。

日支間に外交々渉が始まつて以來、日本は始終親親の情を以て支那に對し、協力して東亞の平和を維持すべきを主張して來た。然るに支那は歐米諸國の力によつて日本を抑へやうとのみ試みてゐる。これは大なる誤であり、日支提携して以て東亞の平和を維持し進展を圖らねばならぬといふことは著者數十年來の持論である。著者從來の幾多の論著何れもこの理想を根柢としてゐないものはない。この故に著者は現在及び將來との連關に於て近代史の重要性を認めて居られる。本書は近く發表さるべき義和拳匪の亂以後、日露戰爭に至る間の滿洲研究と共に、近代より現代に及ぶ歴史の最重要なる一齣の研究であり、從來の諸論著に續いて最も重要な一連鎖を成すものである。

日清戰爭より日露戰爭に至るまでの時期は清朝の滅亡、露西亞帝政の覆没、世界大戰等の世界史上の重大

なる事實を導いた諸要因が醗酵された時期であり、日本の國力が絶大なる發展を遂ぐるに至る重要な時期であつた。従つて現代の東亞延いては世界の大勢を知り將來の方策を定むるには日清戰爭以後の東亞の動きを知ることが必要不可欠である。日清日露兩戰役は日本の勝利によつて從來の東亞に對する歐米諸國の攻勢を阻止し、日本が東亞の盟主となるべき地位を確定した點に於て世界史の上に最も重要な意義を有する。然るに從來此間の歴史の正確精密なる研究が歐米はもとより支那に於ても、更に日本に於てさへも一として存在しなかつた。それは何故であるかといふに、この研究に於て最も必要とされる支那及び露西亞の史料の蒐集整理及び研究が困難であつた爲であり、また餘りに現代に近いたため色々な偏見、獨斷、時論等に煩はされ公平冷靜な史料の取扱ひが出來難いことも一大ハンデイキヤブであつたと思はれる。然るに近年支那に於ては清季外交史料、籌辦夷務始末、中日交渉史料等の龐大なる史料が發表せられ、英吉利に於ても *British Documents on the Origins of the War*, 獨逸に於ても *Die Grosse Politik der Europäischen Kabinetten*

等の如き浩瀚なる外交文書史料が出版され、また露西亞でも外務省、大藏省等の電報、函牘、手記等の貴重な文書に基いたロマノフ、グリンスキー等の著書、ウィッテの回想記、クロバトキンの日記等の如き貴重なる文獻が公刊された。たゞ我國に於ては僅かに一部分のものを除いては根本史料といふべきものは殆ど發表されてゐない。また此時期に關して歐米に於てはブランドンブルグ、クライド、ジョセフ等の學者が研究して居り、それらの人の著書も出版されて居る。然しこれらの研究は主として英獨佛の文獻によつたに過ぎず、支那側、露西亞側の最も重要なべき史料に據つてゐない憾がある。茲に於て著者は銳意これらの史料を蒐集し、グリンスキー、ロマノフ、コロストウエツ等の得難く且つ讀難き諸文獻を始め、支那側の諸外交文書集は素より英米獨佛等の諸史料を網羅し、異常なる熱心と感嘆すべき努力とによつて讀破考覈し、紛糾錯雜せる歴史の真相を正確詳密に研究された。その成果の一部分が本書である。今その要點を述べれば

第一章 下關における日清媾和談判の以前及び交渉中、清國朝廷及び李鴻章が諸外國殊に露・佛・獨に對

して日本の媾和條件の輕減特に土地割讓要求を削減すべく干涉せんことを懇求嘆願し、その結果それら諸外國がこれによつて清國に恩を賣り、利權を要求するであらうといふ明白なる歸結をも顧る違なく、その國家としての面子を毀損するをも敢て嫌はず、あらゆる機會を捉へてその外交機能の全力を擧げて干涉を要請し然かも清國の懇願なくとも歐洲自らの形勢により起つたであらう三國干涉を、その懇求嘆願の結果起つたものと考へ、遂に歐米の力を借れば常に日本を抑へ得ると信ずるに至り、此考が爾後の支那の政策に重大なる影響を及ぼすに至つた。

第二章 外國の干涉によつて日本に遼東を還附せしめ得べきを豫想して下關條約に調印した清國は、なほ外國に援助干涉を懇請して、批准交換以前に於て失地恢復を明確にせんと欲し、その爲批准交換の延期を希望した。その爲に清國は諸外國殊に露西亞に縋つて批准交換を延期せしめんとし、不成功に終るや直接日本に延期を提議した。迂餘曲折を経て、李鴻章より伊藤首相に定められし期日に於て換約すべきを電報し、これと入違ひに伊藤より五日間の延期を認める旨を打電

し、清國朝廷また三國公使に日本の遼東還附の確實なるを説かれて期日通り換約するに決して其旨李鴻章に訓電した。この三事、時を同じうして一八九五年五月八日午後三時に起り、その間髪を容れざる程で、李鴻章は危く專斷の罪を免かれた。かくて批准交換は豫定の期日に行はるゝを得た。

第三章 條約締結につぐものは日本の遼東撤退であつた。露西亞は初め日本が清國に過大なる代償を要求し清國の支拂はざるを口實として無期限に撤退を遅延せしめるであらうことを慮り、可及的に速かなるべきを希望したが、代償は過當ならざる限り容認する意志があつた。然るに其後日本の遼東撤退は代償を要求すべきものでないと主張するに至つた。この變化は最初露西亞が清國の財政能力を過大に評價してゐたのを後に實情を知つた爲に起つたと思はれるが、この前後清國が日本の代償要求を輕減すべく露西亞の援助を懇願し、それがこの變化に重大なる意義を有すると考へられる。露西亞はさきに三國干涉によつて恩を賣り、今また清國の要請によつて日本に仇を構へても清國に恩を施して他日の報償の更に大ならんことを期した。然

し獨逸の反對によつて協調を失すべきを虞れ三千萬兩の代償要求を承認するに至つた。清國はさきに三國干涉により日本の戰勝の重大なる成果を拋棄せしむるを得たので、今度も亦三國の力を借れば日本を屈し得ると考へて露西亞に縋つたものゝやうである。

第四章 露西亞は報償を他日に期したればこそ三國干涉によつて清國に恩を賣り、遼東代償削減によつて感謝の念を深めしめた。その報償は先づ清露秘密同盟條約となつて具現した。東清鐵道利權と防禦同盟とを核心とする密約の交渉は、北京に於てカッシニと總署大臣とによつて開始され、同時に同様の交渉がペテルブルグに於て李鴻章とロバノフ、ウィットによつても行はれた。すでに露西亞に對して恩を感じ「感謝に充てる」清國はその報償の避くべからざるは覺悟してゐたし、且つ當時清國に於ける輿論は聯露拒日に傾いて居り、露西亞に對する利權讓與の素地は既に成されてゐた。かゝる時戴冠式參賀大使として露都に赴いた李鴻章は、參賀大使としての禮は成して歸らねばならず、露國皇帝の特別の二回の謁見に於て、皇帝が將來の援助を約し熱心に成立を希望した密約交渉を一概に

拒絶すべくもなく、かくて縱令李鴻章が收賄してゐなくともペテルブルグ交渉が成立しなかつたとは考へられない。

第五章 獨逸が膠州澳を占領するや清國は露西亞にこれを撤退せしむべく援助せんことを要請した。清國は露西亞が援助すべきを堅く信じ、滿洲における鐵道其他の利權を讓與した。然かも露西亞は最初より清國を助ける意志は持たなかつたのみならず、これを好機としてその滿洲に對する野心を實現しやうとしたのである。清國が露西亞の意圖に疑惑を抱き露國艦隊の旅順大連碇泊の一時的なることの文書の約束を求むるに至つて、パヴロフは政治的事情許すに至らば撤退すべしといふ曖昧なる遁辭を以て答へ、却つて清國の露西亞に對する不信を責め、更に旅順大連における貯炭所設置、東清鐵道の延長を要求するに至つた。即ち清國は對日本賠償金支拂の爲一方英吉利より、他方露西亞より借款を得んとし、露西亞は是等の利權をその條件とした。然るに英吉利の借款條件はこれよりも清國にとつて有利であつた爲清英露三國三つ巴の紛糾が生じた。清國は兩國の脅迫に苦しみ共に拒絶するに至つた。

た。是に於て露西亞は借款問題とは別に、直截に旅順大連の租借を要求し、清國はこれを拒む能はずして終に旅順大連租借の條約が結ばれた。

第六章 一九〇〇年勃發した義和拳匪の亂は滿洲に波及し、恰も旅順大連を租借し東清鐵道建設に着手せし露西亞をして、東三省占領の機會を捉へしむるに至つたのであつた。

(三國谷 宏)

日本寄語 (四四頁より續く)

活	買	輪	一	寫	身體類	耳	鼻	肩	手	足	心	頭	鬚
吉打	加利	埋計	打利	一萬	加利	加利	加利	加利	加利	加利	加利	加利	加利
(い)キタ	カリ	マケ	タリ	イツケン	カク	ミミ	クチ	ハナ	マイ	アシ	コ	カシ	ヒゲ